
ゴーストパートナー

月野輪熊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーストパートナー

【Nコード】

N6898C

【作者名】

月野輪熊

【あらすじ】

それぞれ人生最悪の不幸に見舞われた、不良高校生と（故）不良高校生の不思議なコンビの物語。二人は不幸から脱する事が出来るのか？そして二人の間に友情は芽生えるのか・・・？

第一話 リヨウジとユカ

ほんの一瞬の出来事だった。

電光石火とはまさにこの事だな、とリヨウジはいつも我ながらに感心する。

足元に趣味の悪い服を着た柄の悪い男が二人、苦しそうにうめきながら横たわっている。

竜と虎の刺繡ししゅうイラストが入ったシャツの男に、刺青いれずみの模様が描かれたシャツを着た男。

「ダサっ！」

リヨウジはうめき続ける二人の男を見下ろして、「ダサくねえか？ こいつらの格好」

リヨウジは笑いながら、隣にいる恋人のユカに言った。

ユカは何も言わずに呆れた表情でこちらを見ている。

「なんだよ」

「……またやったね。もう喧嘩はしないって言わなかったっけ？」

ユカが溜め息をつきつつ言っと、

「ちよ、ちよっと待てよ！ こいつらが喧嘩売ってきたんだぜ。

悪いのはこいつらだ。俺は悪くない！」

リヨウジは、二人の男をあつという間に倒したとは思えないほどの慌てぶりで弁解する。

「それにだいたいさ、日曜の清々しい午前中に女連れのやつに喧嘩売って来る方がどうかしてるだろ。俺はすごい爽やかな笑顔を振り撒いてたはずだ！ 喧嘩を売られる覚えはない」

「いくら喧嘩を売られたからって律儀に買わなくてもいいじゃん」「んじゃ、どうしろってんだよ？」

「逃げれば？」

「逃げる？ この俺が？ そんなの絶対嫌だ。俺がここいら辺のヤンキー共に顔知られてんの知ってるだろ。逃げたりしたらこいつ

らにどんな噂たてられるかわかったもんじゃねえ」

「大変ですねー。有名人は」

ユカは呆れ顔のまま茶化す。

「つーかよ、仮りに逃げたとして、俺は足も速いから逃げられるだろうけど、もしお前だけ捕まったりしたらその時はどうするんだよ」

「助けてよ」

「それじゃ結局同じ事じゃねえか。なら最初からやった方が早い」
ユカとリヨウジはしょっちゅうこんなやりとりをしている。ユカもこんな事を言っているが、本気で呆れているわけではないのである。

「それにしてもさ、三回に一回はデート中に何かしらトラブルよね。目が合っただの何だのつてさ。大抵はあんたがああ『リヨウジ』だって相手が気付いて喧嘩にまでは発展しなくて済んでるけどさ」

「それは……ごめん」

リヨウジは素直に謝った。確かに過去に、予定していたデートが途中で中断したりと、ユカには迷惑をかけたばなしだった。

「ちよつと、そんなにマジに謝らないでよ！ リヨウジらしくないじゃん」

ユカは笑いながら言った。

「わたしなら平気だよ。もう慣れっこだしね」

それはユカの本音だった。

リヨウジとユカは現在高校二年生。恋人として付き合い出してからはまだ一年半ほどだが、二人は幼稚園からの幼馴染みなのであった。

リヨウジは小学生の頃から他校の生徒と喧嘩ばかりしていた。時には中学生とでさえ喧嘩することもあった。しかしユカの知る限りでは、リヨウジが負けた事は一度もない。体はどちらかというと細い方なのに、どこからそんな力が出るのだろうとよく不思議に思ったものだ。

もう一つ、ユカがいつも思う事は、顔を怪我するのはもったいないという事だった。なぜならリヨウジは顔がとても綺麗なのだ。いつか女装させてやろうと密かに企んでいるくらいである。

——リヨウジがヤンキーなどではなく普通の男の子だったら……と思わない事もないが、そんな事今更思っても仕方ない。わたしはヤンキーのリヨウジを好きになったんじゃない。好きなりヨウジがヤンキーになったただだ。リヨウジはリヨウジ。基本的には優しいし、金髪でツンツンした髪型にしたりしてるけど、見た目とは不似合いな素直さだって今も昔と変わらない。怒りっぽい性格なのは短所ではあるが、理不尽な怒り方はしない。無論女の子に手を上げたりなどするはずもない。

幼い頃から一緒にいて、良い所も悪い所も全部ひっくるめて好きになったのだ。

「リヨウジ」

ユカは微笑みながらリヨウジの顔を覗き込む。

「なんだよ」

リヨウジは照れ臭そうに顔を背ける。

ユカはリヨウジの手を握り、

「お腹空いた！ ご飯食べに行こ！」

と言って歩き出した。

第二話 ユースケとハルカ

人生って素晴らしい！

ほんの少し気を抜いただけで顔がニヤついちまう！ 今ならどんなに嫌な事があっても許せる気がする。街ですれ違う人と肩がぶつかったとしても笑って許してやる自信がある。学校でム力つく先公が鬼のように宿題を出したとしても許そう。——まあ、そんなものもともとやった事ないが。おまけに他校のボンクラヤンキーが因縁をつけてきたとしても……いや、これは許せねえな。ボコボコにしてやる！

——とにかく、今の俺はとても心が寛大になってるって事さ！

え？ 何故かって？ …………… って誰も聞いてねえよ！

…………… やべえ。自分にツツコミ入れちまったぜ。

まあ、高校二年生の男が人生の素晴らしさを感じちまう事といえば、だいたい見当は付くと思うが…………… そう！ 彼女だよ！

カ・ノ・ジヨ！

産まれて十七年、ついにこの俺にも彼女が出来たってわけよ！

…………… 何？ 彼女出来るの遅いつて？ うるせえよ！ 俺は

シャイで一途な野郎なんだよ！ 純愛だよ！ 純愛！ ほっ

とけ、この野郎！

「ああ、ハルカちゃん」

ユースケはケータイの待ち受け画面にしているハルカの写真にキスをしながら言った。

今日、俺が人生初のデートを迎える彼女の名前はハルカ。ああ、何て可愛い名前なんだろ。——あ、可愛いのは名前だけじゃないぜ。顔だって可愛いし、声だって可愛い。もう何から何まで可愛い彼女なのさ！

ユースケとハルカは高校のクラスメイトである。入学式当日に

ユースケがハルカに一目惚れをしたのだった。

ユースケ達の通う学校は三年間クラス替えがない為、二年生になっても同じクラスでいる事が出来た。もちろん来年も一緒だ。いや、きつとこの先ずっとずっと一緒だろう！ なんちゃってな！

アハハ！

しかしユースケは入学以来一年半、ハルカとは学校内では友達として仲は良かったものの、告白まではなかなか出来ずに、密かに片想いを続けてきたのだった。

そんなユースケが意を決して告白したキツカケは………予想してた以上にハルカを狙ってる男子生徒が多いって事に気付いたからだった。

冗談じゃねえ！ ハルカが俺以外の男と付き合うなんて、考えただけで発狂しそうになる。もうその心配はないけどな！

ユースケはケータイの時刻表示を見た。九時三十五分。約束の時間は十時だ。今日は俺のバイクで海までツーリングするのさ。もう夏は終わっちまったけど、そんなの関係ねえ！ 彼女が出来たら二人きりで海に行くってのが俺の中学の頃からの夢だったんだ。

「そろそろ行くとするか！」

ここからハルカの家までバイクで十五分くらい。学校はしょっちゅう遅刻しているが、デートの待ち合わせに遅刻するわけにはいかない。

「その前に愛しのハルカちゃんに電話しよつと」

ハルカの番号を押し、ケータイを耳にあてると、呼び出し音が一回鳴り終わる前にハルカが出た。

「はいはい。おはよう、ユースケ！」

「おっす！ つーか電話出るの早っ！」

「だって朝からずっと待ってたんだもん」

——やばい。可愛すぎるぜ。

「待ってたんだもん」って！ ユースケは幸せすぎて、すでに泣きそうだった。

「てかユースケ、今朝は寝坊せずに起きたんだね」

ハルカはクスクス笑いながら言った。「わたし、緊張してあんまり寝れなくて、早く起きちゃったから、起こしてあげようか迷ってたんだけど、昨日夜の十二時までバイトとか言ってたから可哀想だと思ってやめたんだ」

「起きれますとも！　ハルカとの初デートだったのに寝坊するはずがない！　……………　つーか俺なんて緊張しすぎて一睡もしないよ」

「ええっ？　そんなんで海までバイクの運転大丈夫？　わたし、まだ死にたくないよ……………　あ、でもユースケと一緒になら死んでもいいかな。なんちゃって」

ユースケは本気でもう死んでもいいと思った。そのくらい幸せだった。世界中のやつらに『バカップル』と呼ばれても構わない。なんなら頭に『超』をつけてもらっても全然オーケーだ。死ぬまでこういう事が言い合えるバカップルで在りたい。

「嬉しい事言ってくれるぜ」

と言つて、ユースケが泣く真似をするとハルカは笑った。

「つーかそれは任せて下さい。勉強はまるで出来ませんが、バイクの運転だけは自信があります」

「ホントに？」

「ホントだつて！」

ユースケは本当にバイクの運転には自信があるのだった。なんてったつて、中学生の頃から無免許でさんざん乗り回してきたのだから！

「とにかく今から行くよ」

「わかった。んじゃ待つてるね」

電話を切ると、ユースケはケータイをポケットにしまい、机の上の小さな箱を手にとった。ハルカのために買ったプレゼント。大した物ではないが、俺の気持ちはたくさん込めたつもりだ。きつと喜んでくれるはずだ。

それをズボンのポケットに入れると、ユースケはバイクのキーを掴み、本当に宙に浮きそうな軽い足取りで家を出た。庭に停められたバイクに跨り、ヘルメットを被る。そしてエンジンキーを入れ、軽くアクセルを吹かすと心地好い振動が全身に伝わってくる。ユースケにはそれすらも自分を祝福してくれているように感じられた。

ガソリンは満タンだ。そこらへんはぬかりはない。

「よし、行くか!」

ユースケはバイクを走り出させた。

——ああ、早くハルカに会いたい。

学校とは違う、誰も知らないハルカ。俺とハルカ二人だけが共有する時間。まさに夢の世界! バイクのスピードはどんどん上がる。そう! 俺のテンションと同じように! さっきハルカに電話で話したように、本当に一睡もしていないが、眠気も体の疲れも一切感じない。恋ってすげえな! こんなパワーも与えてくれるなんて!

この調子なら十分くらいで到着しちまうな!

交通量はそれほど多くない道だ。飛ばしても全く問題ない。――

——俺的にはだが。

ユースケは最近ハマっている曲を鼻歌で歌いながら……いや、ほぼ熱唱しながらさらにスピードを上げた。

その時だった。突然バイクの前を物凄いスピードで横切る物体が目に入った。――猫だ!

「危ねっ」

ユースケは一瞬冷やりとしたが、まだ避けられると確信出来る余裕があった。しかし、その一瞬の余裕がいけなかった。

その猫の子供らしい子猫が親猫の後を追うように飛び出して来たのだった。

ユースケはハンドルを切りすぎた。何とか子猫も避ける事は出来たが、バイクはバランスを失った。

ハンドルは左右ヘガクガクと小刻みに震え、車体が揺れる。ユ

ースケは必死に持ち直そうとするが言う事をきかない。体が宙に浮き出す。掌が滲んだ脂汗のせいで滑った。

バイクは歩道のガードレールを掠め、完全に操縦不能となり、コースケはバイクごと電柱に激突した。

ハルカの顔を思い描く事すら出来ない、ほんの一瞬の出来事だった。

第三話 事故現場にて～回想その一～

リヨウジとユカがファーストフード店でハンバーガーを食べ終えて、店を出ると、店の前の道をけたたましいサイレンを鳴り響かせながらパトカーと救急車が通り過ぎて行った。

「事故か？」

「みたいね」

二人はパトカーと救急車が走り去って行った方へと目をやる。するとサイレンが鳴り止んだ。パトカーが停車した辺りに人だかりが出来ている。

「すぐそこみたいだぜ」

リヨウジは不謹慎にも目を輝かせて言った。

「行ってみようぜ」

「え？ やめようよ。怪我した人とか見たくないよ」

ユカは交通事故や火災現場などの災害に関する野次馬根性は皆無だった。

「俺に殴られて怪我した野郎達を何度も見てるじゃん」

「見たくて見てるわけじゃないでしょ。それにあれは本人達が怪我する覚悟の上で喧嘩してるわけだし、自業自得じゃん」

もつともな意見だった。

「いいからとにかく行ってみようぜ。遠くからチラッと見るだけだよ」

リヨウジは言いながら体はもう事故現場の方へと向かっている。

「嫌ならここで待ってるよ。ちよこっただけ見てくる」

そう言ってリヨウジは走り出した。

現場近くまで来ると、かなりの人だかりになっている。

どんな事故だ？ 車か？ それともバイクか？

リヨウジは人垣の後方から背伸びをして覗き込んだ。

「なこりゃ。自爆か。」

——ひで

モロに電柱に激突したらしく、バイクがくの字にひしゃげている。路上にボツコリと額の辺りが凹んだ状態で割れたヘルメットが転がっており、白いチョークで囲まれながら事故の壮絶さを物語っている。

即死だなこりゃ。さすがにリヨウジも死体を目の当たりにするのは勘弁だったが、それはすでに救急車に運びこまれたところだった。まだ息があるのかどうか知らないが、あのヘルメットを見る限りではかなり危険な状態だろう。

救急車が再びサイレンを鳴らし、走り出した。

「高校生みたいよ」

「可哀想にねえ……」

リヨウジの前にいる主婦達が話しているのが聞こえてきた。

——高校生か。そりゃ確かに可哀想だな。

俺も中学生の時は意気がってバイクを乗り回したりしていたからな。

今ではそんな馬鹿げた事などする気も起きないが、当時は警察に捕まろうが、事故って死のうがどうでもよかったし、恐怖心など皆無だった。とにかく何もかもがおもしろくなって、心から打ち解け合ってもいけない、形だけの仲間とつるんでは他人に迷惑ばかりかけていた。ユカにもかなり心配させていた事だろう。

まだ十七年しか生きてないんだ。この先どんな事が待っているのかわからない。結局つまらない人生のままなのか、ものすごいハッピーな人生を送る事が出来るのか……。とにかくどっちに転がるにしても、それは生きていてこそその話だ。生きていれば可能性は未知数なのだ。死んじまったら全て終わりだ。

まあ、こういう考え方が持てるようになったのもユカと付き合い出したおかげだけだな。

俺がこの世でただ一つ、自分の命に代えてでも守りたいもの、守るべきものはユカしかない。

リヨウジには両親がいない。父と母はリヨウジが幼い頃に離婚し

た。そしてリヨウジは母親に女手一つで育てられた。とにかくリヨウジから見て母親はいつも苦労の人だった。そんな母親もリヨウジが小学五年生の時に病気で他界した。

母親の葬式の日、リヨウジの今後について親族会議が開かれた。

「リヨウジ君の今後の事だが、やはり黒沢さんが引き取るのが筋だろう。実の父親であるわけだし」

リヨウジの母親である光子の兄、中川一郎が言い出した。

「そうですけど、あの人の行方がわからないじゃないですか」

と言ったのは、光子の弟の二郎の嫁である中川良美。

「そんなのどうにかして探し出させればいいだろう」

「けど、一度は光子さんやリヨウジ君を捨てて出ていった人ですよ。仮に所在がわかったとしても、とても引き取って育てるとは思えないわ」

「実の親だろうが。引き取るも引き取らないもない。それは当然の義務だ」

今この場には、リヨウジの母親である中川光子の兄、一郎夫妻と弟の二郎夫妻、そしてもう一人の弟である三郎夫妻がいる。

リヨウジの父親である黒沢徹雄の姿はなかった。徹雄とは光子と離婚して以来、誰も行方を知らず、連絡が取れない状況であったからだ。

「現実的に考えたらやはり我々でどうするかを考えなくてはな」

と三郎が言い、妻の幸恵が頷く。

「とはいえ、難しい問題だよこれは。特にうちは来年、息子が大学受験だし受ければ入学に金がかかる。兄貴のところみたいに子供がいなければ経済的に余裕があるかもしれないが」

二郎は、最初からあからさまに拒否をアピールしている。

「うちだってそんな余裕あるものか。しかもうちは、家が福岡だ。リヨウジ君の学校等の環境を考えたら二郎か三郎のところの方が転

校もせずに済むし、いいと思うが」

「この際リヨウジ君の環境がどうか言ってる場合じゃないでしょう」

三郎が若干声を荒げて言った。

「兄貴達の言い分もわかるけど、嫌だ嫌だと言つてたらいつまで経つても話しは堂々巡りだ」

「別に嫌だなどとは言つてない」

「うちだつてそうだ」

一郎と二郎はバツが悪そうに言った。二人の妻も、

「そうですねえ」と小声でつぶやきながら頷き合っている。

「そうだ。三郎」

と言つて、一郎は何かを閃いたように目を光らせる。

「お前のところは息子の隆志君ももう今年から社会人になって家を出的わけだしちょうどいいんじゃないか」

三郎は兄がそう言い出すのはわかつていた。そしてこう言った。

「うちで面倒見るのは構わない。それは幸恵とも話し合った。けど、リヨウジ君の養育費は兄貴達も負担してくれるんだろ？ 経済的に余裕がないのはどこも同じなんだから」

「それは……もちろんだ。なあ陽子」

と、一郎は言い、妻が頷く。

「それじゃ、それで決まりだな」

二郎は早々とこの話を決着させようとした。多少金を負担してでもリヨウジを引き取るよりはマシだと思つていたからだ。

「じゃあ、そういう事でいいね？」

三郎は妻の幸恵に再確認し、はい、と幸恵が答える。

三郎は姉の光子が亡くなったと報せを受けた時に、リヨウジの面倒は自分達夫婦が見ようと決めていた。妻の幸恵も同じ考えだった。三郎が幼少期の頃から四人兄弟の中で一番光子と仲が良かったし、互いに家庭を持つてからも、家族ぐるみの付き合いがあった。幸恵と光子もとても気が合った。

初めは光子夫妻もとても幸せそうだった。夫の徹雄とも三郎はよく一緒に酒を飲みに行ったりする仲だった。しかし、徹雄と光子の夫婦関係が狂い出したのは、徹雄が会社をリストラされ、次の職がなかなか見つからずに、いつしか酒浸りの生活に陥ってしまったからだった。

光子夫妻が離婚すると決まった時、二人の兄は徹雄の事を散々責め立てた。全ておまえの責任だと。お前が酒浸りで仕事も見つけずにグウタラしてるから光子もリヨウジも不幸になったのだと。リヨウジがいる目の前で。

とにかく、そんな兄達だから、リヨウジの面倒など見ると言い出すはずがないとわかっていた。だから三郎はあえてこの話題を兄達から振らせた。そして兄達の性格を知りえた三郎の計算通りに話しを進め、養育費を三等分させる事が出来た。経済的余裕がないわけではなかったが、それくらいの協力は死んだ光子の兄弟として当然だろう。

三郎は立ち上がり、二階の子供部屋へと歩き出す。

子供部屋では息子の隆志とリヨウジが二人で話をしていた。落ち込むリヨウジを隆志が気遣い、気を紛らわせる為にいろいろ話し掛けていたらしい。二郎の息子は来週に大事な試験があるから勉強する、と言って、光子の告別式が終わるとしばらくして自宅に帰ってしまった。

「リヨウジ君」

三郎が呼び掛けると、二人がこちらを振り返る。

「大事な話があるんだ」

「何？」

「君のこれからの事だ」

リヨウジの顔が深刻なものになる。

「今みんな話合っていたんだけど、今日からおじさんの家で一緒に暮らそうか」

リヨウジはで下を向き黙ってしまっている。

無理もない事だ。まだ小学生だというのに両親を失い、この先どうしたらいいのかなどわかるはずもない。

「嫌かい？」

リヨウジは首を横に振った。

「よろしく願います」

リヨウジは言った。

三郎は優しく微笑むと、

「よし！これからよろしくな」

と言つて、リヨウジの頭を撫でた。リヨウジは内心ホツとしていた。正直なところ叔父の一郎と二郎はあまり好きではない。

「うちなら学校も転校する事ないからな。それに、なんて言つたっけ？ リヨウジ君と仲良しの女の子」

「あー、ユカちゃんな」

隆志が代わりに答える。

「そうそう、ユカちゃんだ。あの子とも離れずにすむしな！」

と、三郎がからかうとリヨウジは顔を赤らめる。

リヨウジが一番気にかかっていた事だった。ユカに会えなくなるのは嫌だ。転校せずに済むとわかり心底安心した。

第四話 事故現場にて―回想その二―

そして、三郎夫妻の元での生活が始まったのだが、平穏な日々はそう長くは続かなかった。

社会人になった隆志が家を出て一年ほど経った頃の事だった。会社の先輩に仕事帰りに連れて行かれたキャバクラに完全に嵌まってしまった隆志は、キャバクラ嬢に本気で恋をしてしまったのだった。

男子校に通っていたせいで女性と出会う機会が少なかった為に、人懐っこく接してくる店の女性に熱を上げてしまった。

それだけならまだ良かったのだが、隆志は彼女の気を引く為に度々プレゼントを買ったりしていた。所謂貢ぎ物というやつだ。新入社員の隆志にそれほど稼ぎなどあるはずもなく、軽い気持ちでサラ金に手を出してしまったのだった。初めのうちはきちんと給料日に返済出来る分だけ借りていたのが、次第に借りる額も回数も増え、気付いたときにはどうにもならない状態になっていた。

隆志は久しぶりに実家を訪れるなり全ての事情を両親に話した。

「何を考えてるんだ、お前は！」

三郎が怒鳴り、テーブルを叩く激しい音が家中に響いた。

リヨウジは三郎がこんなに怒っているところを見るのは初めてだった。

リヨウジが見ている事に気付いた三郎は、

「リヨウジ、自分の部屋へ行つてなさい」と言った。

リヨウジが二階の自分の部屋へ戻ると、三郎は話を続けた。

「隆志、父さん情けねえよ」

「……ごめん」

隆志は俯いたまま小さな声で言った。

三郎はため息をつき、頭を掻きむしる。幸恵はその隣で泣いて

いる。

「やらかしちまった事を今更どうする事も出来ない。今回だけは父さんが何とかする。社会勉強だと思って心から反省しろ。高い授業料だかな。いいか、同じ過ちは絶対に犯すな。わかったか」

「……はい」

隆志は素直に謝った。

「父さん、母さん本当にごめんなさい」

リヨウジが自分の部屋に戻り、漫画を読んでいると、しばらくしてドアをノックする音がした。入るぞ、と言って、隆志が入ってきた。

「カッコ悪いとこ見られちまったな」

隆志が頭を掻きながら言った。リヨウジは黙ったまま隆志の様子を窺っていた。どうして叔父さんに怒られていたのか、何となく聞いてはいけない気がしたからだ。

「リヨウジ。女ってヤツは怖えぞ」

隆志は自分から話し出した。

「何が？」

「男に気があるように見せかけて、男を弄びやがるんだ」

隆志の表情は悲壮感に満ち溢れていた。いつもの明るい隆志ではなく、とても卑屈そうに見えた。「俺は博史みたいに大学も行ってねえ、ただの高卒の能無し野郎だ」

博史とは、二郎の息子で隆志とリヨウジの従兄弟である。隆志は続ける。リヨウジに話しているというより、それは独り、心の叫びを吐き出しているように聞こえた。

「所詮女が男に求めるものは、顔の良さと金と肩書きさ。俺は何一つ持つちゃいねえ。こんなんじや女が振り向くはずもねえよな」

と言って、隆志は力無く笑った。

「そんな人ばっかじゃないと思うよ」

リヨウジは言った。隆志を励ますつもりで言ったのではなく、

本当にそう思っているから言った。 「そんなヤツばかりなんだよ！」

突然隆志は怒鳴り出した。

「お前はまだガキだからわからねえだろうけどな」

——じゃあ俺に話さなけりやいいのに、とリヨウジは思ったが、口には出さなかった。きっと社会人には子供にはわからない気苦労が多いのだろう。

「女の事だけじゃない。男だってそうだ。誰もが他人より優位に立ちたがる！ だから、身近にいるやつの中から自分より劣ってるやつを見つけては、そいつを見下して自分の愚かさを忘れようとするのさ！ そいつらだってたいした事のないくだらない奴らなのに！ どいつもこいつも俺を馬鹿にしがって！」

隆志は目に涙を浮かべていた。隆志は会社で先輩達から完全に無視をされていたのだった。初めのうちは飲みに関連してもらったりして仲良くやっていたのだが、隆志がキャバクラ嬢に熱を上げ周りの事がよく見えなくなってしまったのがそもその原因だった。

ある日、先輩の一人が隆志がキャバ嬢に貢ぐためにサラ金に手を出している事を知り、そんな事するのはやめろ。あいつらは男を喜ばすのが『仕事』なんだ。マジになったらえらい目見るぞ、と忠告した。しかし隆志は、言う事を聞かず、その先輩に逆ギレしてしまった。それからというものの、先輩達からは呆れられ、誰からも相手にされなくなってしまったのだった。

「リヨウジ、お前も学校で周りのやつらから馬鹿にされたりするだろう？ 親父も母親もいない、みなしごだ、とかよ」

「……言われないよ、そんな事」

リヨウジは答えながら思った。

——俺の前にいるこの人は一体誰だ？

昔の隆志なら、こんな事絶対に言わなかった。

「そうか。そっぴやお前は喧嘩強えもんなあ。そんな事言えるや

つはいないか」

と言つて、隆志はまた卑屈な笑みを浮かべる。

「だけどリヨウジ。喧嘩の強さが通用するのなんて男にだけだぞ。それも学生のうちだけだ。そんなもん女にとつてはどうでもいい事なんだ。お前の幼馴染みのユカつて子もそのうちどっか行っちゃうよ。頭のいい、金持ちの家に生まれたやつの所によ！」

「ユカはそんなやつじゃないよ」

リヨウジは言った。ずっとおとなしく隆志の話を聞いていただけだったが、この話にはさすがに我慢出来なかった。

——これが、あの優しかった隆志兄ちゃんなのか？

大人になるにつれて、人はこんなにも変わってしまうものなのか？

「今はまだ、お前もユカつて子も何もわかつてねえだけだ。中学、高校となるにつれてわかつてくんだよ！」

隆志はさらに続ける。もう、自分が話している相手が小学生のリヨウジだという事すら忘れているかのように。

「よく考えてみる。親の愛に包まれて何不自由なく生きて来たやつと、両親を早くに失い、肩身の狭い思いをして居候しなければならぬやつとのどちらが恵まれてると思う？ 女つてやつはな、ロマンチストぶって人生に夢見がちな事言つてても、結局は金だの地位だのに靡く超現実主義者なんだ！ユカつて子もそのうちそうなるぞ！」

アハハハ」

——やめろ。

「どんなに喧嘩が強かろうと、女を守る事なんて出来やしねえんだ！」

——やめろ！

「断言してやるよ！ ユカつて子もそのうち気付く！ 正しい選択肢はどれかって事にな！ そしてそれは真の意味での強者で、ただ喧嘩が強いだけのお前じゃない！ それが女つて生き物なのさ！」

「やめろっ！」

——リヨウジが我に帰った時、背後から三郎に体を羽交い締めにされていた。そして自分の足元には、鼻と口から血を垂らして隆志が横たわり、その上に幸恵が覆いかぶさるようにして肩を震わせて泣きながら何かを叫んでいた。

リヨウジも泣いていた。悔しくて。悲しくて。

ユカを侮辱された事。そして隆志が変わってしまった事。

何が人を変えるの？ 変わらなければ大人になれないの？ 変わる事が大人になるって事なの？

だとしたら大人になんかなりたくない。

——つか、もう、どうでもいいや。何もかも……。

リヨウジは大事な物を失った気がした。いや、自分の手でぶち壊しただけか……。

その日を境に、リヨウジは心を閉ざした。

「リヨウジ。ちょっと、リヨウジ！」

と、ユカは小声で言っつて、リヨウジの肩を叩く。リヨウジは一点を見つめたまま放心しているように見えたからだ。

「ん？」

リヨウジは返事をして振り向くものの、まだボーッとしている。

「どうしたのよ？ ポケッとして……」

ユカは言いながらリヨウジの顔を見て、驚いた表情を浮かべる。

「ちよつと、何泣いてるのよ」

「な、泣いてなんかいないよ」

と言っつて、リヨウジは目をゴシゴシ擦った。

「うわ……、ひどいね」

ユカはひしゃげたバイクを見て顔を歪めた。

「ねえ、もう行こうよ」

と言っつて、リヨウジの袖を引っ張る。

「ああ」

と返事をして、リヨウジとユカが歩き出そうとすると、近くにいた三、四歳の女の子が小さな箱のような物を手にして、

「ママー！ これ拾っちゃったー！」

と得意げな笑みを浮かべながら言った。

女の子が手にしているのは、掌に乗るくらいの小さな箱で、潰れかけていたが、細いピンクのリボンがかろうじてかかっている。

女の子の母親が、娘の手にしている物を見て、顔をしかめると「ダメよ。バッチイからポイしなさい」

と言った。

女の子は少しだけ残念そうな表情を浮かべたが、すぐに、ポイツ、っと口でいいながら道路脇の植木の中へ放り投げた。リヨウジは、何気なくその光景を見ながらユカと共に歩き出した。

「ところでユカ」

ユカの手を繋ぎ、歩きながらリヨウジが言う。

「ん？」

「ラブホ行こう」

「は？」

リヨウジの突拍子もない言葉にユカは慌てて、

「何言ってるの？」

と目を丸くして言った。

しかし、言葉の内容とは裏腹に、リヨウジの表情は、真剣なものだった。

「どうしたのよ一体。さっきから泣いたり、ボケツとしたり……なんだか変だよ？」

リヨウジは目線を足元に落としてボソリと言った。

「抱いてほしい……」

「それ、男が言うセリフ？」

「ち、ちげーよ！ そういう意味じゃなくて……いや、そういう意味でもあるけど……」

リヨウジは顔を赤くしながらモゴモゴと言う。

「なんてゆーか、ギョツてしてほしい」

と言いながら、リヨウジは自分を抱きしめるジェスチャーを試みせる。

その仕草にユカは思わず笑ってしまった。

このギャップの凄さもユカが好きなリヨウジの一面である。

「いいよ。行こう」

と、ユカは言つて、リヨウジと手を強く握り直し、歩き出した。リヨウジは端から見ると恐い人だと思われるだろう。

顔の造りだけ見る分には、今売れているアイドルグループの中に混じっても見劣りしない容貌だが、その醸し出す雰囲気と風貌のせいで、かなり攻撃的な印象を与える。

しかしリヨウジは人一倍淋しがり屋なのだ。それはユカだけが知っている。リヨウジが人の温もりを欲しがった時、決して拒否したりする事は出来ない。そんな事をすれば、あの頃の、心を閉ざしたりヨウジに戻ってしまうだろう。——まあ、もともと拒否する気持ちなどユカにはまるでなかったのだが……。

第五話 病院にて

ユースケはハルカの家に着した。

——何故かわからないが、思ったよりも時間がかかってしまったみたいだ。

ユースケはケータイで時刻を確認しようと、ズボンのポケットに手を入れる。

——約束の時間に遅刻してないだろうな？ 何かの雑誌に書いてあったが、時間にルーズな男は女に嫌われるらしいからな。……といっても、すでにそう思われてるかもしれないな。学校じゃ遅刻の常習者だ……。やばいな……。明日からは学校も遅刻しないように気をつけよう。

ユースケは心を入れ替えようと誓った。

ああ！ やつとハルカに会える！ 緊張するぜ！

しかし、不思議なくらい鼓動は静かだった。昨夜は、ハルカとデート出来るんだ、と考えただけで口から心臓が飛び出しそうなくらい緊張してたのに。——緊張しすぎて逆に落ち着いてしまったのかもしれない。

——あれ？ ケータイがねえぞ。

ユースケは反対側のポケットの中もまさぐってみたが、やっぱり無かった。

——嘘だろ？ バイクに乗ってる時に落としたのか？ 冗談じゃねえよ、先月買ったばかりだったつーのによ！ それに待受画面のハルカの写真もすげえ気に入ってたのに！……つーか、バイクはどこ行った？ 乗って来たはずのバイクがねえ！ バイクがなけりゃ海まで行けねえよ！

ユースケがハルカの家の玄関先でパニックっていると、ガチャリと音がしてドアが開いた。

中から出て来たのはハルカだった。

『あ、ハルカ！　まずい事になっちまったよ！　なんかよくわかんねえんだけど、バイクがどっか行っちまったんだ！　マジでわけわかんねえよ！』

と、ユースケは言ったが、ハルカはノーリアクションだった。

『ハルカ？』

目の前で呼び掛けているのに、ハルカは全くこちらに気付かない。

ユースケは焦った。俺はきつと約束の時間に遅刻したんだ。だからハルカは怒って完全無視を決め込んでいるのだ。

『遅れてごめんよ、ハルカ。余裕で間に合うはずだったんだけど……』

実際にどのくらい遅刻したのか定かではなかったが、ユースケはとにかく謝った。

しかし、ハルカは玄関先から家の前の通りを左右に見渡しただけで、また家の中へ戻ってしまった。

『おい、ハルカ！　ちよつと待てよ！』

と、ユースケは叫んだが、ハルカは出てこなかった。

——そんなに怒るほど遅れたのか俺は？

何から何までおかしい事だらけだ。

ユースケは泣きなくなってきた。せつかくの初デートの日だというのに、ケータイもバイクも無くなっちまうわ、ハルカを怒らせちまうわ……。

『どうなつてんだよマジで……』

——とにかく、土下座でも何でもして謝らなければ！　誠意だ！　誠意が一番大切だ。ユースケは玄関脇にあるインターホンを鳴らそうとした。ハルカの親が出てきたらどうしようか、と一瞬躊躇したが、そんな事気にしている状況ではない。ケータイを無くした今、それ以外に方法は無いのだから。

しかし、その時ユースケは恐ろしい事に気がついた。

『なんだこりゃ？　手が透けてるっ！？』

ユースケは自分の掌を目の前で凝視すると、向こう側が透けて見えた。

——疲れ目だ！ 昨日寝てないから目が疲れて透けてるように見えるだけだ！

ユースケは必死に自分を納得させようとした。

しかし、それは見た目だけの問題ではなかった。

ユースケが震える手でインターホンを押そうとすると、なんと手が壁の中へ吸い込まれるように入ってしまった。

『うわあああああつ！』

ユースケは驚愕のあまり、叫び声を上げた。

——一体、どうなっちまったんだよ、俺の身体は？ 目の錯覚どころの問題じゃねえぞ、これは！ ユースケは再度インターホンに手を伸ばす。

『あわわわ。やっぱ壁の中に手が入っちまう！』

ユースケは、思い切って身体ごと壁の中へ飛び込んでみた。すると、ユースケの身体は、するりとハルカの家の中へと貫通してしまった。

——やべえ！ 俺、どうやら透明人間になっちまったらしい！
こんな事が現実起こるなんて……。

だからハルカは俺の存在に気がつかなかったのだ。

しかし……、本当に現実なのか？ 家を出てからというもの、いろいろな事がありすぎて、わけがわからなくなっている。

といっても、実際に透明人間になっちまったものはしかたない。夢だろうと現実だろうと、とりあえず受け入れるとして……。

だけど神様よあ！ ひどすぎるぜ！ 何で今日なんだよ。そりゃ、ガキの頃に、透明人間になって銭湯や温泉の女風呂に侵入したいとか、好きな女の子の家に忍び込んで入浴シーンを拝みたいとか……って、風呂ばっかじゃねーかよ！……とまあ、とにかく、エロ漫画にありがちな事を夢見た事はあるけどさ。何でよりによって人生初のデートの日なんだよ！

だが、ユースケは頭がパニクリながらも、わずかに好奇心が湧いてきたのだった。

しかし、昔夢見ていた頃と違い、ハルカの部屋に侵入して、何か悪さをしよう、などという考えは、今のユースケには起きなかった。ユースケのハルカに対する思いは紛れもなく純愛なのであった。

——とはいっても……。ハルカが今どんな心境で俺を待っているのかが気になる。……少し部屋を覗くくらいなら許されるだろう。ハルカは俺と出掛けるために全て準備を終えているのだから、着替えをしたりする事はないはずだし。

『おじやまします』

と、ユースケは小声で言った。ユースケは忍び足で家の中へと入って行く。姿は見えなくても不法侵入には変わりない。ユースケは可能な限り気配を殺してハルカの部屋を探した。

——普通は子供部屋と言ったら二階だよな。

ユースケはキッチンの前を通りすぎ、廊下をさらに奥へと進む。突き当たりを左に、二階への階段を上がる。というわけか、壁は貫通出来るのに、足場の感覚はあるような気がする。宙に浮くような感覚はなかった。

二階には二つ部屋があった。ユースケは手前の部屋のドアノブを掴もうとしたが、今の自分にその必要がなかった事を思いだし、部屋のドアを通り抜けた。

部屋の中にはハルカがいた。机に向かい、ケータイを手にしている。

——俺からの連絡を待っているんだ……。

『ハルカ！俺はここにいますよ！』

ユースケは思わず叫んだ。だが、やっぱりハルカに声は届かない。

——こんなに近くで叫んでるのに、どうして声すら届かないのか？透明人間って身体が見えないだけじゃなかったっけ？

ユースケは、ふと思った。もしもこのまま元に戻れなかったら

どうなるんだ？

ユースケは、急にたまらなく不安になってきた。もしも、ずっとこのまま透明のままだったら……。周りの誰からも自分の存在を気付いてもらえない孤独感に耐え続ける事など不可能だ。現に今、もうすでに限界が近づいている。

ユースケが不安な気持ちに駆られていると、ハルカのケータイの着信音が鳴りだした。

——あれ？ このメロディー、ハルカが一番好きな曲で、俺だけからの着信音に設定するって言ってたやつだ……。

ハルカはケータイの通話ボタンを押し、

「もしもし、ユースケ？」

と、心配そうな顔で言った。

——やっぱり俺のケータイだ。きつと誰かが拾ってくれて、一番新しい通話履歴であるハルカに電話をくれたのだろう。

「一体、どうし……」

ハルカの言葉が途中で途切れた。ハルカの顔から血の気が一気に引くのがはつきりわかった。

「えっ？ はい……、はい……」

ハルカの表情はとても深刻である。

「わかりました。○ □ 総合病院ですね。すぐ行きます」

と、ハルカは言うど、椅子から立ち上がり、シヨルダーバッグを肩に提げる。

——○ □ 総合病院？ ここのすぐ近くの病院だ。俺のケータイからだよね……。一体何だというのだろう。

ユースケが戸惑っていると、ハルカがこちらに向かって歩き出す。

『うわっ』

ユースケは慌てて避けようとしたが間に合わなかった。だが、歩き出したハルカはユースケの身体を通り抜けて、部屋を出て行ったのだった。

《ユースケ!》

『え?』

ユースケは名前を呼ばれた気がして、辺りを見回す。

——誰だ? ハルカの声ではない。母ちゃんか? そうだ。

母ちゃんの声だ! どうして母ちゃんの声が聞こえたのだろうか

……。

《ユースケ!》

——また聞こえた。間違いない。母ちゃんの声だ。それも叫ぶように俺の名前を呼んでいる。何なんだ?

と、その時、ユースケの身体は急に何かに引つ張られるような感じがして、足が地面から離れた。『うわあああつ! 今度は何なんだよ?!!』

次の瞬間、ユースケの身体はものすごいスピードで移動し始めた。目まぐるしく周りの景色が流れ過ぎて行く。

『うわああああああああああつ!』

ユースケの身体は、ユースケの意思とは関係なく、まるで何かに手繰り寄せられるように、移動し続ける。そしてわずか数秒後、景色の流れが止まった。

——何だったんだ。今は? つーか、どこだここは?

ユースケは周囲を見回す。どこかの建物内の廊下に立っていた。やけに薄暗く感じる。それにとっても静まり返った場所だ。薬の匂いに混じって微かに線香の匂いもする。どうやらここはユースケの嫌いな場所であるようだ。

——病院? ……もしかして○ □ 総合病院か? 透明にな

ったり、瞬間移動したり……やっぱり夢かもしれないな、これは。

ユースケは目の前にある扉を見た。扉の上にプレートが貼ってあり、そこにはこう表示されていた。

【霊安室】

——なんでこんなとこに来ちゃったんだ? 気味が悪いな

……。ますますわけがわからなくなってきたぞ。

さすがに霊安室の中に入る気はしない。ユースケは自分が何をすべきかわからず、その場に立ち尽くしていた。

すると、しばらくして、廊下の突き当たりにあるエレベーターの扉が開く音がした。

エレベーターから降りて来たのはハル力だった。この早さからすると、タクシーでここまでやってきたのだろうか。

ハル力が靴音を響かせながら走ってこちらに向かって来る。この薄暗い廊下でも、ハル力の顔が青ざめているのがわかった。

——ハル力の両親のどちらかに不幸があったのだろうか……。いや、ハル力宛てにかかってきた電話は俺のケータイからだったはずだ。一体どういう事なのか……。

ハル力はユースケのすぐ傍に立ち止まり、霊安室の扉の前で深く深呼吸をする。

ハル力が扉を開け、霊安室の中へと入って行く。ユースケもそれに続いて中へと歩を進めた。

「……あなたがハル力ちゃん？」

と言ったのは、ベッドの脇に置かれたパイプ椅子に腰掛けていたユースケの母親だった。

『母ちゃん！ 何やってんだよ、こんな所で』

ユースケは思わず叫んだ。しかし室内の二人には聞こえなかった。

——何でここに母ちゃんがいるんだ？ それにハル力まで

……。二人はまだ面識はないはずだ。ハル力はユースケの母の問い掛けに頷いた。声が出てこない。頷くだけで精一杯だった。

「ごめんね。びっくりしたでしょう？ こんな事になってしまつて……」

ユースケの母が声を震わせながら言った。

ハル力は部屋に入ってからずっと、ベッドの上に横たわっている、人型に盛り上がったシートから目が離せずにいる。

「あの子、今朝早くからソワソワしてたから、どうしたのって聞

いたら『彼女とデートだ』って言うじゃない。それであの子のケータイから、あなたにだけは早く知らせなくちゃいけないと思って電話したの」

——母ちゃんが俺のケータイからハルカに電話した？ 何の為に？

「ユースケ君……………本当に…………？」

ハルカは、深く息を吐いてから言った。この静まり返った場所でも聞き取るのが難しいくらいのかすれた小さな声だった。

ハルカの問い掛けに、今度はユースケの母が頷いて答えた。

「顔……………、見てもいいですか？」

「ええ。顔は綺麗なのよ。ヘルメットはひどい状態だったけど…

…」

と言うと、ユースケの母は肩を震わせて泣き出した。

——嘘だろ？

さすがにユースケも、ここまでの二人の会話を聞いていれば事実を察する事が出来た。

——俺は……………、死んだのか？

ハルカがゆっくりとベッドに近づく。そしてベッドの上に寝ている人間の顔にかけられた布に手をかける。

しかし、ハルカは、しばらくその状態から動けずにいた。

ユースケも息を飲んでそれを見守る事しか出来ずにいた。ユースケの母は、俯いたまま啜り泣いている。

かなりの時間を要してから、ハルカはゆっくりと布をめくった。

布の下から、頭から額にかけて包帯が巻かれたユースケの顔が現れた途端、ハルカは泣き崩れた。

——やっぱりそうか。

俺は透明人間などになっただけではなかった。そしてきつとこれは夢でもないのだろう。

——俺は死んだんだ。だからさっきハルカの家に着いた時も、ハルカに会えるつてのにドキドキしなかったんだ。死んでるん

じや鼓動を感じるはずもないもんな。

『何やってんだよ……お前』

ユースケは、まるで眠っているだけのように見える自分に向かって言った。『全てこれからだつてのによ……』

ユースケは、小学生の時から母一人、子一人の母子家庭で育つた。

中学時代はお決まりのパターンにはまり、バイクの暴走行為、喧嘩等の非行行為を繰り返すような不良少年で、母に迷惑ばかりかけていた。今も世間的には『ヤンキー』と呼ばれる人種ではあるが、ハルカと出会ってから非行行為など馬鹿らしくてする気も失せたのだった。母に迷惑かけるのもやめようと心に誓っていたのだった。

『お前、結局周りの人達に迷惑かけっぱなしだったな』

ユースケは自分に語り続けた。『ちっぽけな野郎のまま死んじまいやがってよ。……だけど、ハルカと出会えて……、最後に最高のハッピーがあつて……良かったな！』

と言つて、自分自身に微笑みかけると、ユースケの目から涙がこぼれ落ちた。

——もう、ハルカと話をする事も、手を繋いで歩く事も出来ないんだ……。

ユースケは激しく身体を震わせながら号泣した。——しかしその声は、ハルカや母に届くことはなかった……。

第六話 訃報

「畜生っ！ マジでムカつくぜ、あの野郎！」

と言つて、佐藤はくわえていた煙草を灰皿に押し潰した。

「なあ、鈴木。お前このままやられっぱなしで済ますつもりじゃねーよな？」

「そりゃ腹は立つけどよ……、正直なところ、もうあいつとはやりたくねえかな……」

と、鈴木は答えた。

「噂通りのバケモン並の強さだったじゃねーか。情けねえけど、俺はお前が二発でやられちまった時、ぶっちゃけ怯んじまったよ」

「……三発だ」

「マジかよ？ 俺には顔面に二発くらっただけにしか見えなかったぜ」

「腹にも一発入れられた」

「恐ろしいヤツだな……」

と、鈴木はすっかり弱腰になってしまっている。

この二人、鈴木と佐藤は、日曜の午前中から街を楽しそうに歩いていたカップルにイチャモンをつけ、その彼氏の方に一瞬で叩きのめされるという屈辱を味わった悲惨な二人組だった。二人は意識が完全に回復した後、ここ鈴木の自宅に傷の手当をしに来たのだ……。

「つーか、お前が喧嘩売ったんだろうが。何情けねえ事言ってるだ」

と、竜と虎のシャツの男、佐藤が言った。

「あいつがナカガワリョウジだと知ってたら、喧嘩売ったりしねえよ」

と、完全に戦意を喪失してしまっているくせに刺青柄の挑発的なシャツを来ている鈴木が言う。

「ナカガワリヨウジが、あんな女みたいな顔したヤツだとは思わなかったしさ。もっとゴツイヤツかと思ってたからよ。おまけにあんな可愛い女連れやがって……あん時はマジでムカついちまったんだ。美男美女カップルで爽やかデートしやがって……ってさ」

「まあ、たしかに連れの子は可愛かったな」

「それに引き換え俺らときたらよ、日曜だったのに野郎二人でつるんでよ。あー、俺の青春、このまま終わるんじゃないだろうな」

鈴木と佐藤の会話は、リョウジへの復讐の話から、次第に自分達の恋愛事情の話へとスライドしてきていた……。

「そーいや、ユースケの野郎も彼女出来たんだったな」

と、佐藤が聞くと、

「ユースケの話はするな」

と言つて、鈴木はむくれた。

「あいつは裏切りモンだ。俺の憧れのハルカちゃんと付き合いやがって！」

「ああ、ハルカって、お前らのクラスのマドンナか。あの娘も結構可愛いよな」

「呼び捨てにすんな。それに、結構じゃなくて、超可愛いんだよ！ クソッ！ ユースケの野郎！」

「ただとお前、ユースケより先にあの娘に告って玉碎したんだろ。うが。それでユースケを裏切りモン扱いはひどくねえか？」

「うるせえ！ しばらくあいつとは口聞かねえ！」

佐藤の自分勝手な考えに、こんな男に惹かれる女はいないだろう、と佐藤は内心想ったが、口には出さなかった。

「ところでそんな事よりよ、さっきの件だけど、どうする？」

佐藤は話の軌道を修正した。

「やるだろ？」

「ナカガワか。ああ、やってやるよ！ 幸せボケしてる野郎は半殺しにしてやる！ どんな手を使ってでもな」

さっきまでの臆病さはどこへやら、といった感じで鈴木は言っ

た。——こいつは一生女に縁がなさそうだな、と、佐藤は思ったが、これも口には出さなかった。

二人が復讐計画を立てようとしていると、ケータイの着信音が鳴った。

「俺のケータイだ」

と、佐藤は言つて、傍らに煙草の箱と一緒に放り出していたケータイを手に取った。

「山田からだ」

山田とは、佐藤と鈴木の共通の友人で、所謂、不良仲間である。
「もしもし」

「佐藤、大変な事が起こっちゃった」

山田の声は緊迫していた。

「何だつてんだよ？」

佐藤は緊張感に包まれながら聞きいた。

「ユースケがバイクで事故つて死んだ」

「は？ 冗談だろ？」

「馬鹿野郎、こんな冗談言っわけねーだろ！」

山田の口調は深刻そのものだった。しかし佐藤は、つい今さっきまで話題に上っていたユースケが死んだなどと、すぐには信じられずにいた。

「嘘だろ……」

「おい、どうした？ 山田、何だつて？」

隣で佐藤のケータイでのやり取りを聞いていた鈴木は、ただ事でない雰囲気を感じて聞いた。

「ユースケが……、ユースケが死んだって……」

佐藤が呆然とした状態で言っていると、鈴木は、

「ちよつと貸してくれ」

と言つて、佐藤からケータイを奪い取る。

「山田。マジなのかよ、それ？」

「鈴木か？ マジだ。とりあえず○ □ 総合病院にすぐ来い。俺

「でも今向かってるところだ」

「わ、わかった」

「と言って、電話を切った。」

「佐藤、○ □ 総合病院へ行くぞ！ みんなも向かってるらしい」

鈴木と佐藤はケータイと煙草をポケットにねじ込み、足早に病院へ向かった。

第七話 心の安らぐ場所

心地好いまどろみ。リヨウジにとって最も心が安らぐ時間、そして場所。

ここはラブホテルの一室。といっても、もちろんラブホテルがリヨウジの心が安らぐ場所というわけではない。ユカと二人きりになれる場所ならどこでも構わなかった。

リヨウジはベッドに横になったまま、枕元のケータイを手探りで取った。時刻を確認する。もう少して退室時間だった。

「ユカ」

リヨウジは、隣で眠っているユカの身体を軽く揺すりながら言った。

ユカは気持ち良さそうに、リヨウジの左腕を腕枕にして眠っている。寝顔は微かに微笑んでいるようにさえ見えるほど心地好さそうだ。

「ま、延長すりゃいいか」

と言つてリヨウジは、ユカの身体を優しく抱きしめた。

——ずっとこうしていられりゃいいのに。

抱き合う度に思う事がある。自分は一人ぼっちではないのだという事。そして、ユカを死ぬまで守り続けたい、という事。

リヨウジは再びあの日の事を思い出す。

隆志が言った言葉。

『ユカもきつと大人になるにつれ、お前から離ていくよ』——百パーセントその不安が無いか、と問われれば、正直なところイエスとは言えない。限りなく百パーセントに近く信用していても、それでも不安は付き纏う。だからこそ、こうしてユカと一つになる時、リヨウジは改めて心に誓うのだ。ユカを絶対に幸せにしてみせる、と。

リヨウジはユカに全てをさらけ出している。家庭事情からユカ

への思いまで、何から何まで全部。幼い頃から一緒にいたユカだからこそ全てを受け入れられたのだろう。

リヨウジが生きる事に意味を感じなくなったあの日、死を選ばずに済んだのはもちろんユカがいたからだった。

隆志との事件以降、リヨウジは家では一切口を開かなくなった。三郎とも幸恵とも。

三郎はいろいろとリヨウジに対して会話を求めて来たりしたが、全て無視し続けた。

幸恵の方は、理由が何であれ、実の息子を怪我させたリヨウジに対し、一切言葉をかけてくる事はなくなったのだった。

そしてリヨウジは、中学の三年間、荒んだ日々を送った。

三郎夫妻に心を閉ざしていても、彼らの金銭的援助がなければ生活する事すら出来ない自分の無力さにも苛立ちを感じていた。

この時期はユカとも今までほど行動を共にする事は少なくなっていた。

学校へは休みがちながらも、かろうじて必要な出席日数を満たす程度は登校した。

とにかく家にいる事が苦痛で、放課後は夜中まで仲間とバイクで暴走行為を繰り返したり、他の学校の生徒らと喧嘩ばかりする日々が続いた。

そして中学卒業を間近に迎えたある日の事。三郎からとある提案が出された。それは必要最低限の生活費は援助するから、一人で生活してみてもどうか、というものだった。リヨウジにとってそれは願ってもない事だった。もちろんリヨウジは即了承した。そして、リヨウジが三郎夫妻の家を出る日、三郎は言った。

「いいか、リヨウジ。ここへ戻ってきたくなったら、いつでも戻ってきていいんだぞ」

リヨウジはしばらく黙っていたが、お世話になりました、とだけ言い、頭を下げると家を出たのだった。当時は素直になる事は出来ないままであったが、リヨウジは、三郎夫妻には本当に心から感

謝していた。現在もアパートの家賃と生活費は援助してもらっているが、リヨウジはアルバイトで貯めている金をいつの日か礼と共に返さなければと思っている。

リヨウジが高校生活と共にスタートした一人暮らしは、リヨウジを精神的に鍛え、成長させた。そして何よりユカと恋人として付き合っきっかけとなった。

一人暮らしを始めてしばらくすると、学校帰りにユカは毎日リヨウジの家へ行くようになった。

そしてたまに夕食を作って一緒に食べたりした。リヨウジは台所に立つユカの後ろ姿を見ていて、たまらなく愛おしくなり、恋人として付き合いたいと告白し、二人の交際は始まったのだった。しかし二人は、この部屋を愛の巣のように利用する事はなかった。リヨウジ自身のお金で借りている部屋ではなかったから、何となく違う気がした。ユカも同意見だった。それは自分一人の力で生活出来るようになってからでいい。だからユカもリヨウジの部屋に泊まったりしたことは無かった。

リヨウジが想いにふけっていると視線を感じた。ユカの大きな瞳がこちらを見つめて微笑んでいた。

「起きたか」

「うん」

と、ユカは返事をして、

「また昔の事思い出してたでしょ？」

と、聞いた。リヨウジの表情を見れば、ユカにはわかる。

「ああ。ユカと付き合い出した頃の事。こうしていると、いつも思い出すんだ」

「ふうん」

「ユカ……ずっと傍にいてくれよな」

と、リヨウジが顔を赤くして言うと、ユカは微笑んで、

「当たり前じゃん」

と言って、リヨウジを強く抱きしめた。

退室時間ギリギリでホテルを出たりヨウジとユカは、リョウジのアパートで夕食を採る事に決めた。

「スーパ―寄っていい」

と、ユカが言った。

「どうせ冷蔵庫の中、空っぽなんでしょ？」 「マーガリンと烏龍茶だけ入ってる」

「どんな料理の達人でもそれじゃ何も作れないよ……。さ、スーパ―行こう！」

と言って、ユカはリョウジの手を掴み歩き出した。

第八話 最初で最後のキス

ユースケは泣いていた。しかし、今頬を伝う涙は、先程までの涙とは違った。

霊安室のベッドに寝かされたユースケの周りには、訃報を聞いて集まった仲間達が顔を揃えていた。ハルカから連絡を受けた女友達五人、そしてユースケの不良仲間達が七人、それぞれ悲しみの表情を浮かべてユースケの周りを取り囲んでいる。

——山田、田中、伊藤、加藤、石井、佐藤、鈴木……。端から見てるとみんなただのチンピラみてーだけど、俺の為にすっ飛んで来てくれるなんてよお。最近ハルカの事ばかりで、お前らとはつるんでなかったけど、やっぱりいい仲間達だったんだな……。

「これ……マジで死んじまってるのかよ……」

と、山田が呆然とした表情で言った。

「信じられねえよ……」

山田はユースケとは小学校時代からの一番仲のいい友達だった。

——山田……。そのうちWデートする約束してたのにな。ごめん。こんな事になっちまって。

その後しばらく、言葉を発する者はいなかった。この場にいる全員が、友人の死という事実を受け入れられずに、ただベッドに寝かされているユースケを見つめる事しか出来ずにいた。

「なんでだよ……」

嗚咽と共に、鈴木がかすれた声で沈黙を破った。

「何やってんだよ……何やってんだよ、馬鹿野郎！」

と言って、鈴木はユースケの胸倉を両手で掴み、身体を揺すった。

「鈴木！」

山田がにそれを制止しようと、鈴木の肩に手をかけた。

「……俺、ユースケとは喧嘩別れしたまんまだったんだ」

鈴木は泣きながら言った。

「それも単なる俺のひがみで、ユースケに裏切りモンだなんて、ひでー事言って……。まさかこんな事になるなんてよ……。ごめんユースケ」

——鈴木。別に俺は怒ってなんかねーぞ。もし逆の立場だったら。もしもお前がハルカと付き合う事になっていたら、俺はお前を殺してたかもしれないんだから。同じ女を好きになったモン同士、気持ちは痛いほど理解出来る。

「大丈夫だよ鈴木。ユースケはそんな事いちいち気にするような奴じゃねえ」

と、山田が鈴木を慰める。

——さすが山田。俺の事をよくわかってるなあ。そしてまた沈黙が降りてくる。

この場が集まっている誰もが、ハルカの様子を窺っていた。

ユースケとハルカが付き合いだし、今日が初デートの予定だった事をみんなが知っていたから。あれほど幸せそうな顔で浮かれていたユースケがまさかもう二度と笑う事も出来なくなるなど誰も想像していなかった。ハルカもちろん同様だろう。しかし、今彼女にかけてあげられる言葉を、誰も持ち合わせてはいなかった。

そのハルカは沈痛な面持ちで、ただただユースケの顔を見つめている。

ハルカのこんな暗い表情を見るのは誰もが初めてであった。もちろんユースケもだ。ハルカは学校でも笑顔を絶やさない明るい娘だった。

——あー、出来る事なら今すぐその身体に戻って『うつそぴょーん!』とみんなを驚かせてやりてえよ……。つーか、もしかしたら可能なんじゃねーか？　だって実際中身の俺はここにこうしているのだから！

『やってみんべ』

と言つて、ユースケはベッドに乗り、自分の肉体に重なるよう

にして仰向けに寝転がった。そして目を閉じてみる。

『神様、仏様。どうかお願いです。俺に最後の奇跡を起こしてください』

祈りを込めて、ユースケは上半身を起こしてみた。ゆっくりと目を開き、周囲を見回す。

みんな先程と同じ表情だった。誰も驚いてはいなかった。

—— やっぱ無理か……。そりゃそーだよな。今までさんざん悪さをやらかしてきた俺に、神様や仏様が奇跡なんて起こしてくれるはずがねえ。

しかし、一人だけ俺を見ている人間がいた。ハルカだった。

『え……？』

ユースケは驚いて、自分の身体を見た。だが、やはり身体は横たわったままだ。しかし、どう見ても俺とハルカは今目が合っている。

「どうしたの？ ハルカ」

と、ハルカの異変に気付いた由美が聞いた。由美は山田の彼女である。ここにいる女子四人の由美、美紀、美香、優はハルカの親友でユースケとも仲がよかったグループである。

「—— 今、ユースケが一瞬起き上がったように見えた……」

と、ハルカは大きく目を見開いている。

「気のせいだったみたい……」

そのハルカの言葉を聞いた由美達は、ハルカを感じる激しい悲しみが伝わって来て、涙が溢れ出した。山田達、男連中の目からも涙がこぼれる。

『気のせいなんかじゃないよ、ハルカ！ 俺はここにいるんだよ！』

ユースケは叫んだ。しかしここにいる誰にもその声は届かない。そして、それきりハルカと目が合う事もなかった。

—— 確かにハルカは俺を見ていた。ほんの僅かの短い時間だったけど、確実に……。奇跡を起こしてくれたんだな。ありがとう

神様、仏様。これだけでも充分嬉しいよ……。

「ハルカちゃん、頼みがあるんだけどよ……」
と山田が言った。

「頼みって……何？」

「その……ちょっと言いづらいんだけどさ……キス……してやってくれないか」

「え？」

「ユースケの奴、普段はおちゃらけた軽い奴だと思われてるかもしれないけど、ホントはすげー純情な野郎なんだ。ハルカちゃんの事も入学した時からずっと真剣に思い続けてたんだ。これは俺しか知らない事だと思うけど……。んで、やっと付き合える事になった時、泣いてたよ、あいつ」

みんなが山田の話を真剣に聞いている。ハルカはすでに涙をボロボロとこぼしている。山田は話を続けた。

「もし、今日何事もなくデートしていたとしても、きっと手を繋ぐ事くらいしか出来なかったと思う。とにかくそのくらい純情なやつなんだ、あいつは……。そんなあいつが、このままあの世に逝っちゃうなんて……可哀相……すぎるよ……」

と、山田は言ったが、後半、涙でほとんど言葉にならなかった。

——ちょっと待てよ、何言いつすんだよ山田！ 急にそんな事言われても、心の準備が出来てねえよ！ いや、ありがたい話だけどさ……。

ユースケがパニックっていると、ハルカがベッドのすぐ傍まで歩み寄ってくる。

——マ、マジかよ？

ユースケはとりあえず仰向けに横になり、先程と同じように自分の身体と重なるようにした。

ハルカがユースケの手を握る。その手の冷たさに、ハルカは一瞬たじろいだ。

「ユースケ……」

ハルカの心に更なる深い悲しみが押し寄せる。

「私も、ユースケと仲良くなってから、ずっと好きだったんだよ……」

と、ハルカはユースケに語りかけた。手を握り返してくれる事もなければ、微笑みかけてくれる事もない現実に打ちのめされないように、しっかりと気を持ちながら。

——ハルカも俺の事をそんなに前から想っていてくれてたなんて。もっと早くに勇気を出して想いを伝える事が出来ていたら……。

ユースケは、自分の性格を激しく呪った。まさに後悔先に立たずだった。人の性格など、そう簡単に換えられるものではないかもしれない。しかし生きていれば、努力すればもしかしたら変われたかもしれない。だがユースケにはもうそれが出来ない。自分を変えようと努力する事すらも。

ハルカの顔がゆっくりと近づいてくる。止まっている心臓が動き出しそうなほどの緊張感。ハルカが目を閉じて、ユースケの唇に自分の唇をそっと重ねた。

——ああ……。夢にまで見たハルカとのキスがやっと出来たんだ。もう死んでもいいや。……って、とつくに死んでんのか……。

長いキスだった。そして、その時ハルカもユースケも、互いに唇に微かな温もりを感じ合っていた。しかし、そんなはずがないと思いついていた。気のせいなんだと。だがそれは決して気のせいなどではなかったのだ……。二人の愛が通じ合った、最初で最後のキスであった。

第九話 因縁

ガツン、という鈍い音が暗い夜道に響き渡った。

顔を殴られた男が吹っ飛び、自動販売機に激しく身体を打ち付ける。

「なあ、僕ちゃん。俺は有り金全部寄越せなんて、鬼みたいな事言ってないよ。ノド乾いちゃったからジュース代だけくれって言ってるんだよ」

と、島遼太郎は言って、倒れた男の脇腹にさらに蹴りを打ち込んだ。男がうめき声上げ、地面に嘔吐する。

「汚えな」

と、言って島は慌てて一步後ずさった。

「す……すいま……せん。こ、これで勘弁……して……ください」

と言って、殴られた男は、震える手で尻のポケットから財布を取り出すと、中から壱万円札を出し、島に差し出した。

「キヤー！ 万券だよ、島っち！ リッチじゃんこいつ」

と、島の連れの女がはしゃぐ。

島は男から壱万円札を受け取り、男を見た。男は涙と吐瀉物に汚れた顔で島を見返す。

「なあ、僕ちゃん。俺はジュースが飲みてえって言ったんだよ。なあ、ユカリ？」

島にそう聞かれたユカリという女は、

「え？ まあ、そうだけど、いいじゃん？ それで」

と、戸惑いつつ答えた。

島は再び男を睨み付ける。

「万券じゃ、その自販機で買えねーだろうが！ ちったあ氣い使えよ、この野郎！」

と、言いながら島は、男の腹をまた蹴った。

男はすでにグッタリしている。 島は、男の手から財布を奪い

取り、

「そんな気の利かない僕ちゃんには、罰として有り金全部頂こう」

と言って、中身の札を全て自分のジーンポケットに挟込み、空の財布を男の顔に向けて放り投げた。

「島っちひどーい」

と言って、ユカリはキャハハと笑った。

「んじゃ、せつかくこの僕ちゃんがお金をくれたので、飲みにも行くとするか」

「うん！ 行こう行こう」

と言って、島とユカリが、行きつけの居酒屋へ向かおうとする
と、高校生くらいと思われるカップルがこちらへ向かって歩いて来
た。

「やっぱり川田だ」

とカップルの男の方が言い、島とユカリの方へ顔を向けた。

「お前か？ こいつやったの」

金髪の、女みたいな顔をした男だった。

「あ？ 何だお前。だったらなんだってんだよ」

と、島はヘラヘラと笑いながら、

「正義の味方です、ってか？」

と言うと、ユカリと二人、腹を抱えて笑い転げる。

「川田君、大丈夫？」

と、カップルの女の方が、道路に倒れたままの男に歩み寄り、
言った。

「そいつは俺のダチだ。黙って見過ごすわけにはいかねえぞ、てめ
え」

と言って、金髪の男が島を睨み付ける。

「おい。金髪。お前誰に口聞いてんのかわかってんのか」

と言って、島が声に凄みを効かせ睨み返す。

「お前だよ」

金髪の男が言う。島の迫力が全く効いていないようだった。

——この野郎。平然としやがって！ ム力つく野郎だ！ ……
ん、待てよ。そーいや最近、えれー強い金髪の野郎がいるとか耳にした事あるな。もしかして、こいつの事か？

「おい。お前もしかしてナカガワリヨウジか？」

と、島は訊いた。

「だつたら何なんだよ」

「ハハハ！ やっぱりそうか。お前、強えらしいな。最近ずいぶん調子に乗ってるみてーじゃねーか？ どうりでこの俺にもビビらねえはずだ」

「俺はお前の事なんか知らねえよ」

「そりや知らねえのも無理ねえわな。俺はお前らみてーに表立って喧嘩したりしねーんだ。そんなの体力の無駄だ。体力は女とやる為だけに使うのよ。それに俺はここが売りなんぞでな」

と、島は言つて、自分の頭を指差した。

「俺の周りのヤンキー連中は駒だ。その駒を使つて、ここいら一帯を指揮つてんだ俺は」

「うるせえな。おしゃべりはいいいから、土下座して謝るか、俺とやんのか早く決めろよ」

と、リヨウジが言つと、島は顔を引き攣らせた。

「おい。てめえ。あんまり調子に乗ってんじゃねえぞ」

と言つて、島がリヨウジに向かつて足を踏み出そうとすると、

「島さん！」

と、呼び掛けられて、島は足を止め、振り返つた。

リヨウジも声のした、島の後方に目をやる。見るからに柄の悪い男が数人こちらに向かつてくる。

「島さん、どうしたんすか？」

「何だ、お前らか」

と言つてから、島は何かを閃いたように目を光らせた。

「ちようどいいや。お前ら、この金髪君やつちまえよ。なんとこいつは最近巷で有名なナカガワリヨウジ君だ。こいつに勝てば一気に

名が売れるぜ！」

「あつ！ ナカガワ！ てめえ今朝はよくも……」

と言ったのは、今朝リヨウジに叩きのめされた、竜と虎の刺繍イラストが描かれたシャツを着た男だった。

「おい、やめろよ佐藤！ 今はそれどころじゃねえだろ」

と言つて、仲間の一人が制止する。

「島さん、実は……」

と、男が言いかけたところで、

「おい」

と、リヨウジが割つて入る。

「ピーチクパーチクやってんじゃねーよ。早くしろこの野郎！」

「ナカガワ。俺は西高の山田だ。悪いけど今日はマジで勘弁してくれないか？」

「ふざけんな。こつちはその時代遅れのロン毛野郎にダチをやられてんだ」

「俺が代わりに謝る」

と、山田が言つと、

「おい、山田。てめえ何勝手な事言つてんだ。俺の言う事が聞けねえのか？ 俺はこいつをやつちまえと言つてんだ」

と言つて、島は山田の胸倉を掴んだ。

「島さん。事情は後でお話します。だから今日のところは……」

と、山田が言いかけたところで、島の体が吹っ飛んだ。島に胸倉を掴まれていた山田も、よろけて地面に倒れる。島は先程自分が川田にしたように自動販売機に同じように叩きつけられて、のびてしまった。男達がア然とした表情で島とリヨウジを交互に見遣る。

「うるせえつつてんだよ」

と言つて、リヨウジは、島の知り合いと思われる男達に目を向ける。

「何だ？ 何か文句あんのか」

しかし、男達は皆揃つて驚愕の表情を浮かべ立ち尽くしている。

「マジかよ……」

「島さんが一発でやられちゃった……」

男達は皆、西校の卒業生である島の強さ、そして恐さを知っている。

島は山田達が一年生の時、三年生だった。

島はひと昔前で言うところの『裏番』的存在だった。当時、ここら辺のヤンキー達が誰も逆らう事の出来なかった西校の番格の先輩でさえ、島には手出ししないという噂だった。言うなれば現在のリヨウジのような存在だったのだ。その島がたった一撃でノサレてしまったとなれば、山田達が怖じけづくのも無理はなかった。

「ねえ、リヨウジ。もういいでしょ？ 川田君、病院連れて行った方がいいかも」

リヨウジは、腹部を押さえて倒れ込んでいる川田の汚れたシャツを捲り上げた。胸から脇腹辺りが赤黒く腫れている。もしかしたら骨折している可能性がある。

「川田、今救急車呼ぶからな」

と、リヨウジは言ってケータイを取り出し、一一九を押し、救急車を呼んだ。

「おい、この場にいたらまずいぞ。ずらかるべ！」

と、佐藤が言くと、山田達、西校の連中は、

「島さん！ 島さん！ 逃げないとまずいですよ！」

と、島に声をかけるが、島は倒れたまま動かない。

「おい、誰か肩貸せ！」

と言つて、山田は島の身体を起こした。鈴木が山田の反対側から島の身体を支えて、立ち上がらせる。

「おい、ナカガワ。原因はどうあれ、お前も島さんに一発入れてんだ。チクするような真似しないほうがいいぞ。それに島さんがこのまま黙ってるはずはねえ。必ずお前に復讐すると思う。そこんこは頭に入れておけよ。正直なところ、俺はお前とはあまり関わりたくないが……」

「俺もお前らとは関わりたくねえよ。面倒くせえ」

と、リヨウジが言うつと、また佐藤が苛立ち、リヨウジに何かを言おうとしたが、すぐに山田が制止した。

「喧嘩なんかしてる場合じゃねえ。行くぞ、みんな」

と、山田が声をかけると、男達は、そそくさとこの場から走り去って行った。

第十話 島という男

山田達は、気を失っている島を担ぎながら、近くの産業廃棄物処理場へと身を隠した。

この周辺は住宅街で他に身を潜めるところが無く、島をこのまま放って帰るわけにもいかず、どうするべきか迷っていたところに、この産業廃棄物処理場の前を通りかかった。ここの裏のフェンスが大きく破れている事を思い出した鈴木が、ここなら身を隠せるドラム缶や使い古されたタイヤが山のように積まれている、と言って、とりあえずここに入る事にしたのだった。

「山田、どうするよ?」

と、鈴木は言った。

「島さんこのままにして帰ったら後でボコられるぜ」

「あの…、島さんの彼女さんすか?」

と、山田は、横たわっている島の頭をひざ枕している女を見て言った。見た事のない女だった。島は会う度に違う女を連れてくるから、この女も島の遊び相手の一人だろう、と山田は思った。

「うん。といっても昨日付き合い出したばかりだけど……。あ、私はユカリ」

と、名乗ってから、ユカリは島の顔を見ながら、

「それにしても、まさか島っちゃんが、やられるなんて……。さっきの誰なの? ナカガワとかいったっけ?」

と言った。

「はい。あいつは東高のやつで、ここら辺じゃかなり名の知れた野郎です」

と、山田は答えた。

「ユカリさんは、家はこの近くなんですか?」

「私の家は電車で二駅隣」

「じゃあ、ダメだな……。島さんの家って知ってますか?」

「これから行こうとしてたとこだったから、まだ知らない」

「そうですか……。お前らも島さんの家知らないよな？」

山田は、鈴木や佐藤の方を見て聞いたが、誰も知らなかった。

山田達が、島をどうしたらいいのか悩んでいると、この産業廃棄物処理場の前の通りを救急車がサイレンを鳴らしながら通過していった。

すると、島がうめき声をあげながら意識を取り戻した。

この場に緊張感が漂い出したのを山田は感じた。佐藤や鈴木達が皆、島がどういう反応で来るのか恐れているのだ。もちろん山田自身もだった。

「痛てて……」

島は起き上がろうとしたが、殴られた頬と、打ち付けた頭が痛み、またユカリの太腿に頭を乗せた。

「島っち、大丈夫？」

と言つて、ユカリが島の頬を摩ろうとすると、

「痛えな！ 触んじゃねえよ、馬鹿野郎！」

と、島は怒鳴つて、ユカリの手を払いのけた。

「ごめん……」

と、ユカリは悲しげな表情で謝った。

島は頭を押さえながら、よろめきながらも、何とか立ち上がる
と、

「おい、ナカガワの野郎はどうした？ まさかそのまま逃がしたわけじゃねえだろうな？」

と言つて、山田達を一人一人睨み付けた。

「いや、その、あいつの連れの女が救急車を呼ぶとか言い出したんで……」

と、山田が言つと、島は山田の胸倉を掴んで、

「それでお前らが逃げて来たつてか？」

と、怒鳴った。

「ふざけんじゃねえぞ、てめえら！ 俺に不意打ち喰らわして、勝

ったような面してこの街の奴らに言い触らしたりしてやがったらどうすんだ？ あ！？」

「お、俺の見た感じ、あいつはそういう事するような奴とは思わ……」

山田が言い終わる前に、島の拳が山田の顔面にめり込み、山田は積み上げられているタイヤに肩から突っ込み、その反動で地面に倒れ込んだ。

「山田。てめえ、さっきから誰に意見してんだ」

と言つて、島は俯せに倒れている山田の髪の毛を鷲掴みして起き上がらせる。周りの男達は、口出し出来ずに、ただ成り行きを見つめて立ち尽くすしかなかった。

「す……すみません。ですが、先程もお話しようと思いました通り、今日はそんな事してる場合じゃなくて……」

山田が言つと、またそこで、今度は島の膝が山田の腹に突き刺さった。

山田は腹を押さえたそのままの姿勢で、膝からガクンと崩れ落ち地面に顔を打ち付けながらのびてしまった。

「『そんな事』じゃねえんだよ。あいつはただでさえ、『無敵の金髪』とか言われて調子コイてんだろが！ あんな不意打ちしか出来ねえ卑怯モンに一発入れられたまま黙ってられるか！ お前らは俺が言つた事にハイハイ言つて従つてりゃいいんだ」

と言つて、島は山田の後頭部を足でグリグリと踏みにじった。

「で、さっきからこいつが言おうとしてた事は何だ？」

と、島が訊くと、男達は互いに顔を見合わせ、お前が話せよ、とそれぞれが目で言い争っている。島は何が起爆剤となるかわからない男だ。誰もが皆、直接島と関わるのは避けたいと思っているのだ。

「何黙ってたんだよ。おい、佐藤！」

と、島に名指しされた佐藤は、「ハ、ハイ。……じ、実はその……、ユースケのやつが、バ、バイクで事故つて……し、死んじ

まいりました……」

と、しどろもどろに言った。

「死んだ？ ユースケが？」

「はい……」

と、佐藤が答えると、島は神妙な表情で俯いた。

冷酷非道な島でも、さすがに後輩の死には心が痛むんだな、と佐藤が思ったその時、島は長髪を掻き上げながら、

「ハハハ！ 馬鹿な野郎だ！ 女にうつつをぬかして浮かれてやるからだ」

と言つて、笑った。

「高校に上がった途端、すっかり腑抜け野郎に成り下がってたからな、あいつ」

島の言葉に、佐藤達は苛立ちながらも、何も言い返す事は出来なかった。

「で、その自業自得で死んだ野郎と、不意打ち喰らって可哀相な恩義ある先輩、お前らにとって大事なのはどっちなのかもう一度よく考えて答えろや」

と、島は再び一人一人を睨み付けながら言った。

「佐藤、どうなんだ？」

「……」

佐藤は何も答えられず、俯いてしまった。

「恩義ある先輩だろうがよ！」

と言つて、島は足の裏で佐藤の腹を蹴った。佐藤はそのまま後方に尻餅をついた後、腹を押さえてうずくまった。

それを見たその他の男達の顔から一気に血の気が引いた。ユカリも何も口出す事が出来ずに、島の行動を黙って見ているしかなかった。

「鈴木、お前はどうかんだよ？」

「お、俺は……、その……」

「即答しろよ、この野郎！」

と、島は鈴木にも佐藤と同じようにして蹴りを入れた。佐藤がその場にうずくまり、他の連中は今にも逃げ出しそうに、二、三步後ずさった。

島が後ずさった男達の方へ歩み寄る。

「伊藤、お前はどっちなんだ？」

「俺はもちろん島さんです！」
と、伊藤は震える声で即答してみせた。

「そうか。伊藤は仲間の死よりも俺の方が大事か？」

と、島は笑顔で言う、伊藤は、

「そりやもちろんですよ！ ユースケは島さんの言う通り自業自得なんですから」

と言つて、媚びへつらい、ヘラヘラと笑った。

「だよなあ？」

と、島も笑つて言つたが、次の瞬間、伊藤の胸倉を掴み左頬に拳を打ち込んだ。伊藤は大袈裟に思えるほど、地面をゴロゴロと転がり、並べられたドラム缶に身体を打ち付けた。

「だったら何でナカガワをやらねえんだよ。心にもねえ事言つてんじゃねえよ」

と言つて島は、残りの加藤、石井、田中を次々と殴り倒した。

男達7人全員が地面に倒れている光景を、ユカリはただただ怯えた表情で見つめていた。

「おい、お前ら。ナカガワのやつをシメる時はお前らに働いてもらうからよ。その時や連絡するから、ケータイ握りしめていつでも動ける準備しとけや」

と、島はうずくまっている男達に言つて、ユカリの方へ振り返ると、

「ユカリ。飲みに行くぞ。気分悪い」

と言つて、歩き出した。

ユカリは正直なところ、そんな気分ではなくなっていた。

島が喧嘩っ早くて、この街のヤンキー達に恐れられている存在であ

る事はもちろん知っているし、もし島の彼女になれば自分も一目置かれる存在になれるかもしれない、などという浅ましい考えで島に近づいたのだが、ユカリは今となっては激しく後悔していた。自分の後輩の死を悲しむ事もなければ、友人の死に悲痛な思いをしている後輩達に容赦のない仕打ちが出来てしまう島に対して、先程まで抱いていた恋心など急激に冷めきってしまった。今ではもう、島に対する感情は恐怖以外にない。今すぐに島の傍から逃げ出したい。しかし出来なかった。きっと島は女であろうと容赦はしないだろう。全て自分の思い通りに行かないと気が済まない人間なのだ。そんな島に逆らう勇氣など、ユカリは持ち合わせてはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6898c/>

ゴーストパートナー

2010年10月20日02時54分発行